

## 動物に対しての慈しみ



人類と動物の創造主である神は、動物を私たちに仕えるものとしてお創りになりました。私たちは食べ物やミルクを摂取するにあたって、動物に依存します。また私たちは愛情を注ぎ、共に付き合うために動物を家屋に入れたりもします。私たちが致命的な病気から救われ、長生き出来るのは、動物を利用した生物実験があるおかげです。また私たちは動物園や水族館を訪問することで、地球上の様々な異なる生物の壮観を察することが出来ます。また特に犬の訓練においては、違法薬物の探知や視覚障害者の先導、その他の障害者の援助などの利益を蒙っています。神はクルアーン（コーラン）の中で、こう仰っています：

「そしてかれ（神）は、家畜を創造された。そこにはあなたの方のための暖かい衣服やその他の利益があり、またあなたの方はそれを食する。またそこには、あなた方が（それらを率いて牧草地から）夕に戻って来る時、そして朝に（それらを率いて牧草地へと）赴く時、甘美さがある。またそれらは、あなた方が苦勞抜きでは到達不可能な町にまで、あなた方の重荷を運搬してくれる。実にあなた方の主は、この上なく哀れみ深く、慈悲深いお方であられる。また馬とラバとロバはあなた方が乗用とし、飾りとするためのもの。そして（神は、それ以外にも）あなた方の知らないものをもお創りになられる。」（クルアーン 16:5-8）

イスラームの慈悲は人間だけに留まらず、神の全被造物にまで向けられています。イスラーム教は動物に対する残酷行為を禁じています。また、近代的な動物の権利運動は、ピーター・スィンガーの「動物の解放」が1975年に出版されると共に始まりましたが、イスラーム教はそれより1400年も前に動物への優しさを命じていました。そしてそれだけではなく、動

物を虐げることは、人が地獄へと放り込まれる十分な理由の一つであるとさえしたのです！

ある時、慈悲深き預言者ムハンマドは、動物に対して慈悲深くあることによって神のお赦しを得られることについて話しました。彼は彼の教友たちに、旅路の途中で喉の渇きに襲われたある男の話の話を語りました。男は井戸を見つけ、その中に降りて水に至り、渇きを癒やしました。しかしそこから出て来た時、彼は極度の渇きから泥を舐めて喘いでいる一匹の犬を見つけました。彼はこう考えました：「この犬は、私がそうであったように、喉が渇いているのだ！」それで彼は再度井戸を降りて行き、犬のための水を持って来てやりました。それで神は彼の善行をお喜びになり、彼の罪をお赦しになりました。そこで教友たちは尋ねました：「神の使徒よ、我々は動物に対する慈しみににおいても報奨を得るのですか？」すると彼は、こう答えました：「あらゆる生物に対する善行には、報奨があるのだ。」<sup>[1]</sup>

また使徒ムハンマド（彼に神のご慈悲と祝福あれ）は別の折に、ある女性が神によって罰された話をしました。その女性は猫一匹のせいで地獄に入ったのです。それはひとえに彼女が猫を幽閉し、餌も与えなければ、それを離して餌を取ることすらも許さなかったからです。<sup>[2]</sup>

またイスラームは、動物を屠殺する際の規定に関しても、慈悲深さを命じています。イスラームは、動物の苦痛を最小限に留めるような屠殺法を強調しているのです。まず屠殺するための刃物は、その動物の眼前で研がないように命じていますし、動物を別の動物の前で屠殺することも禁じられています。このような動物への気遣いは、世界中でもイスラームの発祥以前に見られたことはありませんでした。

動物に対するイスラーム的な慈悲深さは、以下のポイントに要約することが出来るでしょう：

まず、イスラームはペットや家畜に対し、適切な飲食物と生活の場を提供することを命じています。ある時預言者ムハンマドは、飢えのため痩せ衰えたラクダのもとを通りかかり、こう言いました：

「自分たちの意思を喋ることの出来ない、これらの動物において神を畏れるのだ。それらを乗用とするのであれば、（それ相応の強靱な体にするための食事を与えるなどして）それに応じた扱いをせよ。また、もしそれらを食用とするのであれば、（太らせたり健康に気を遣うなどして）やはりそれに応じた扱いをするのだ。」（アブー・ダーウードによる伝承）

二番目には、動物は叩いたり、痛めつけたりしてはなりません。ある時、慈悲深き預言者ムハンマドは顔に烙印を付けられた家畜の横を通りかかり、こう言いました：「動物の顔に烙印を押ししたり、その顔を殴ったりする者を私が呪ったことを知らなかったのか？」[3]また預言者ムハンマドは彼の妻に対し、言うことを聞かないラクダには優しく乗るようとアドバイスしました。[4]また、遊興のために動物同士を戦わせることも、預言者によって禁じられています。[5]

三番目に、イスラームは動物や鳥を、射撃訓練などのために標的として使用することを禁じています。預言者ムハンマドの教友の一人イブン・ウマルは、人々が雌鶏を標的にして弓の射的の練習をしているのを見て、こう言いました：

「預言者は（練習するために）生き物を標的にする者を、呪われたのだぞ。」

また預言者ムハンマドは、こうも言いました：

「正当な権利もなく鳥やそれ以外のものを殺す者は、神がそのことについて彼に尋ねられよう。」そこで誰かがこう尋ねました：「神の預言者よ、その正当な権利とは何ですか？」彼は答えました：「それらを食べ物として殺すことだ。…そしてその首をはねて、放り投げたりしてはいけない。」（アッ＝タルギーブ・ワッ＝タルヒーブに収録された伝承）

生きたハトの射的は以前オリンピック競技の一つでしたし、今日に至るまで多くの場所で許可されています。

四番目に、イスラームは雛鳥を母鳥から離別させることを許可していません。

五番目に、正当な理由もなく動物の耳や尻尾やその他の身体器官を切断することは、禁じられています。

六番目に、飼育している動物が病気に罹ったら、適切な処置を施さなければなりません。

ムスリム（イスラーム教徒）は、動物に関して定められたこれらの法と規定を通し、他の生物を好きなように扱ったり虐待したりすべきではない、という敬意の念と理解を養います。そして動物もまた、イスラームの正義と慈悲がこの地球上に居住する全ての存在の要求を満たすということを確認すべく、人間同様に満たされるべき諸権利を有しているのです。

---

**Footnotes:**

- [1] サヒーフ・アル＝ブハーリー収録の伝承。
- [2] 同上。
- [3] アブー・ダーウードとムスリム収録の伝承。
- [4] ムスリムの伝承。
- [5] アブー・ダーウードとアッ＝ティルミズィー収録の伝承。